

「第1回若手交流セミナー」開催報告

日本熱帯生態学会 若手イノベーション委員会
原 将也(神戸大学)

若手イノベーション委員会では、若手研究者の効果的な支援を目的とし、若手会員を中心に活動しています。コロナウイルス感染症のパンデミックにより、研究や教育活動が制限されました。最近では社会情勢が安定しはじめ、今年度より国内外でのフィールドワークを再開される会員の方々も多いことと存じます。しかしながら日本熱帯生態学会の年次大会は、2020年と2021年にはオンライン、2022年にはハイブリッドでの開催を余儀なくされました。関連する研究会などのイベントもオンラインでの開催が多く、学界でネットワークをもたない大学院生などの若手会員の情報交換や勉強、交流の機会が失われたことが心配されています。そこで若手イノベーション委員会では、若手会員をはじめとし、幅広い世代、分野の研究者の交流を活性化し、研究成果の公表だけでなく、熱帯にまつわる情報交換、交流の機会を設けることとしました。

このような経緯から、2023年1月20日(金)20:00~21:30(日本時間)に「JASTE 第1回若手交流セミナー」をオンラインで開催しました。セミナーの冒頭に、中林雅委員長より趣旨説明がありました(写真1)。前半には中米パナマを舞台とした熱帯研究の紹介、後半には ZOOM ブレイクアウトルーム機能を用いた参加者同士の交流を企画しました。前半の研究紹介では、現在オランダ・ワーヘニンゲン大学に滞在中の藤澤奈都穂会員(日本学術振興会/京都大学)と現在パナマのスマソニアン熱帯研究所に滞在中村亮介会員(京都大学)にご発表いただきました。今回はオランダとパナマと日本をつなぐ必要があり、セミナーの時間を日本時間の夜に設定しました。コロナ禍で対面での研究会は減りましたが、オンライン会議システムの浸透のおかげで、世界各地をリアルタイムにつなぐことが容易になったことは喜ばしいことです。カメルーンのフィールドから参加してくださった方もいらっしゃいました。参加者は、発表者と若手イノベーション委員を含め、合計で23名(非会員9名含む)でした。熱帯研究に関心をもつ非会員の学部生や大学院生だけでなく、若手研究者、ベテランの方々にご参加いただき、世代内、世代間、分野間の交流を目指す当初の目的が果たされました。

藤澤会員には、「パナマのコーヒー農村はコロナ禍をどう乗り越えたか」というタイトルで、コロナ禍のパナマ農村の変容についてお話いただきました(写真

日本熱帯生態学会：交流セミナー（2023/1/20開催）

20:00-20:05 趣旨説明
20:05-20:25 “パナマのコーヒー農村はコロナ禍をどう乗り越えたか” 藤澤奈都穂
20:25-20:45 “パナマで見つけた 植物とケイ素の新たな魅力” 中村亮介
20:45-21:05 グループ交流会（前半）
21:05-21:25 グループ交流会（後半）
21:25-21:30 アナウンス

* Zoom上でお名前の表示をお願いします



写真1. 第1回若手交流セミナーのプログラム。



スープを食べる食習慣があることで、様々な食材の利用を促進、異なった土地の活用につながる

写真2. 藤澤会員による発表。



写真3. 中村会員による発表。

2). パナマの農村では換金用のコーヒーや自家消費用の穀物、イモ類など多様な作物が栽培され、それがアグロフォレストリーの多様な景観に反映されています。コロナ禍では世帯の食事のなかで、購入品である肉や乳製品を食する割合が減り、スープの材料として好まれるイモ類の消費が増えたことが報告されました。また、インタビューから、コロナ禍においてみずからの食料を生産する自給要素の強い農業形態が、世帯の食料確保を支えるセーフティーネットとして、地域住民に再認識された状況が指摘されました。最

後に、地域の生態環境や景観と食料に関する国際共同研究について紹介されました。

中村会員には、「パナマで見つけた植物とケイ素の新たな魅力」というタイトルで、熱帯林におけるケイ素循環と新天地パナマでの試みについてご紹介いただきました(写真3)。中村会員は、これまでマレーシアのボルネオ島キナバル山をメインのフィールドとして、熱帯林において標高や母岩という環境要因と植物群落のケイ素濃度の関係性について研究してきました。マレーシアでは母岩に関係なく、標高が高くなるとケイ素濃度が下がる傾向が明らかになっています。このことをより広範な熱帯地域で検証するべく、パナマに研究滞在されています。パナマでは、さまざまな母岩、標高の環境で群落のケイ素濃度を調べており、最新の分析結果の一端が紹介されました。

後半の参加者交流では、4~5名ずつのグループに分かれ、自己紹介や研究にまつわる情報交換を実施しました(写真4)。学会員、非学会員を問わなかったことで、熱帯研究に関心をもつ大学院生や学部生に参加していただけたことが印象的でした。世代や分野にばらつきが出るよう、事前に若手イノベーション委員会で参加者のグループ分けをおこないました。時間の関係で20分×2ターンしか実施できませんでした。どのグループも活発に交流しており、時間の足りないグループもありました。自己紹介と質問だけで終わってしまうこともあり、少人数で深く交流できるよう、時間配分や仕掛けなどにさらなる工夫が必要だと思っています。

セミナーの最後には、保坂哲朗前幹事長より「JASTE33 第33回日本熱帯生態学会年次大会(高知)」についてアナウンスがありました。対面とオンラインを組み合わせたハイブリッドでの開催、非学会員でも参加できることが説明され、積極的な参加が呼びかけられました。最後に全体で集合写真(写真5)を撮

影し、セミナーを締めました。今回のセミナーは、おふたりによる研究紹介から参加者交流まで、終始和やかに進み、熱帯に関係するさまざまな分野の話題が飛び交い、まさに日本熱帯生態学会らしい会となりました。

なお、参加者の方々より写真の本稿掲載のご了承をいただきました。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

【関連ウェブサイト】

日本熱帯生態学会

若手イノベーション委員会ウェブサイト

<https://jastewakateinnovation.weebly.com/>



写真4. 参加者交流(ブレイクアウトルーム)の様子。

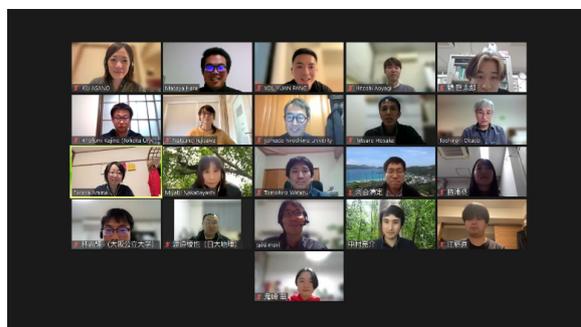


写真5. 参加者全員で集合写真。

日本熱帯生態学会事務局

日本大学生物資源科学部国際地域開発学科
〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866
Email: jaste.adm@gmail.com

The Japan Society of Tropical Ecology General Office
c/o College of Bioresource Sciences, Nihon University
1866 Kameino, Fujisawa, Kanagawa 252-0880, Japan
E-mail: jaste.adm@gmail.com

日本熱帯生態学会ニューズレター 130号

編集 日本熱帯生態学会編集委員会
NL担当: 北村俊平(石川県立大学)
百村帝彦(九州大学)

NL編集事務局
〒921-8836 石川県野々市市末松1丁目308番地
石川県立大学 生物資源環境学部
環境科学科 植物生態学分野(C210)

発行日 2023年2月25日
印刷 株式会社ソウブン・ドットコム
電話 03-3893-0111